

犯罪被害者の心の推論と支援的環境の構築

唐沢 かおり¹ 白岩 祐子¹ 小林 麻衣子²

(¹ 東京大学大学院人文社会系研究科)

(² 筑波大学大学院人間総合科学研究科)

キーワード：被害者支援、ステレオタイプ、メタ推論

問題と目的

本研究は、犯罪被害者やその家族・遺族（以下「被害者」とする）に対し第三者が行う「心の推論」と、「他者からの心の推論」に関して被害者自身が行う推論（メタ推論）に焦点を当て、それぞれの特性や対人態度に及ぼす影響を明らかにする。あわせて、被害者のニーズと第三者・支援者が捉える「被害者のニーズ」とのかい離の状況、およびそのようなギャップが被害者の心理的状态にもたらす影響を特定するものである。

被害者支援の重要性と問題点

犯罪被害がもたらすインパクトは、加害行為を直接受けた被害者本人に加え、家族や遺族にも波及し、その生活を一変させる。とりわけ被害者死亡事件の場合、遺族は、家族の生命が突然奪われるという事態に直面するだけでなく、犯罪という特殊事象に伴う様々な出来事（*e.g.*, 周囲の配慮に欠けた対応やステレオタイプ・偏見、報道への曝露、刑事司法との関わり）とも向き合わなければならない。多くの遺族にとり、これらは人生で初めて体験する事柄であり、事件により日常生活が一変する中で、これらに自力で対処していくことには、大きな困難が伴う。そこで重要になるのが、被害者に対する周囲の支援である。

我が国では、2004年に犯罪被害者等基本法が成立し、被害からの回復は被害者の権利であると位置付けられた。同法では、被害者支援は国や地方自治体および国民の責務であると明記されているが、公的な支援・制度に対する被害者の認知は低く（内閣府, 2009）、遺族を対象とした調査では、事件直後の支援提供者として、家族・親戚や友人など、被害者にとって身近な人が挙げられることが多い（*e.g.*, 大久保・阿久津, 2002; 大和田,

2003）。その割合は、弁護士などの専門家や公的機関による支援より大きく、被害者の周囲にいる人々が、実質的な「支援の担い手」となっていることがうかがわれる。その一方で、被害者が事件後に経験する付随的な被害、すなわち二次被害をもたらすのもまた、被害者の身近にいる人々であると指摘されている（大和田, 2003; 奥村, 2005; 内閣府, 2009）。

このように、被害者の周囲の人々は、支援の実質的な提供者として期待される反面、その支援内容が実情にそぐわない場合には、被害者にさらなる精神的苦痛をもたらし、その回復を妨げる存在ともなりうる。したがって、どのような支援をいつ、どの程度提供することが被害者にとって有益であるのかを把握し、潜在的な支援者を含む一般にひろく周知することは、実効性ある被害者支援、ひいては犯罪被害者等基本法の理念を実現していくために不可欠であるといえるだろう。

本研究の目的と2つのプロジェクト

以上の議論からは、被害者の置かれている状況やそのニーズに関連して、次のような3つの視点を導き出すことができる。すなわち、1) 国民一般は被害者の心の状態をどのように捉えているのか（人々が被害者に対して行う「心の推論」）、2) 被害者は自身がどのような状態にあると考え、またどのように推論されていると認識しているのか（「他者による心の推論」の推論、すなわちメタ推論）、そして、3) 両者の異同の状況と、それが被害者の心理的状态にどのような影響をもたらすのか、という視点である。本研究はこれらを明らかにするため、1) に関連して第三者を検討対象とするプロジェクトと、2) に関連して被害者およびその周囲の人々を検討対象とするプロジェクトによ

って構成される。以下、それぞれの目的と進捗状況、今後の予定を報告する。

プロジェクト1

：被害者の心に対する一般的な理解

本プロジェクトでは、被害者の心の状態に対する一般の人々のステレオタイプの認知の詳細を明らかにする。第三者である一般の人々の認知をとりあげるのは、被害者支援の政策実現には社会的支持が不可欠であることと、犯罪被害が内包する予測不可能性に基づいている。すなわち、一般の人々は、事件により突然被害者の立場になるのと同様に、突然「被害者の周囲の人間」にもなりうるものであり、その意味で、一般の人々もまた潜在的な支援者であるといえるからである。

被害者の心の状態に対するステレオタイプの研究としては、*rape myth* と呼ばれる、性犯罪被害者の潜在的願望に関する個人の信念研究が知られており、このような信念と被害者非難との関係が多く検証されてきた (e.g., Abrams, Viki, Masser, & Bohner, 2003; Frese, Moya, & Megias, 2004; Jenkins & Dambrot, 1987)。しかし、これらの研究が着目してきたのは、性犯罪被害者の「動機」をめぐる第三者の推論であり、このように限定的な知見を被害者全般に一般化することには困難が伴う。そこで本研究では、一般化可能性や支援の重要性などを考慮し、重大事件のうち殺人など死亡事件の被害者を検討対象とすることとした。その上で、被害者に対する一般的なステレオタイプの認知を収集・尺度化し、*Stereotype Content Model* (Fiske, Cuddy, Glick, & Xu, 2002) との関連付けから、社会における被害者の位置付けを明らかにする (調査 I・II)。さらに、これらのステレオタイプが、人々の犯罪理解や、被害者に対する支援意図に及ぼす影響などを把握する (調査 III)。

調査 I : パイロット調査

被害者に対するステレオタイプの認知をひろく収集し、尺度化するための予備的調査を行った。具体的には、被害者特性を「どのような人が被害者になるのか」という被害化ステレオタイプと、「被害者 (遺族) はどのような状態にあるのか」という被害後ステレオタイプに区別し (Buddie

& Miller, 2002 は前者を「文化的ステレオタイプ」、後者を「個人的信念」と呼んでいる)、それぞれについての自由記述を収集し、分類した。

調査会社に依頼して、全国に居住する 20 歳から 70 歳までの男女を対象に Web 調査を実施し、100 名から回答を得た。被害化ステレオタイプについては、加害者との面識の有無や被害状況などによる違いを考慮し、「強盗目的で自宅に侵入した加害者/ストーカー/知人/通り魔に殺害される被害者」ごとに、「性別や年齢などの属性」「社会的地位や職業・経済力」「性格」「交友関係や行動」について、思い浮かんだ被害者特性を記述するよう求めた。その結果、「強盗目的」および「知人」により殺害された被害者に対しては、性格や対人行動上の欠点を指摘する記述が相対的に多くみられ、「裕福だが情は薄い」「社会的地位はあるが自分中心的」など、ポジティブ・ネガティブ要素の混在する相補的なイメージを付与される傾向が確認された。

また被害後ステレオタイプについては、「心理的/身体的/経済的/日常生活における状態」ごとに、「どのような状態にあるか」「必要とされる助け」を尋ねたところ、すべての項目において困窮度の高さを示す記述が多数を占め、とりわけ「精神的ダメージの大きさ」と「加害者に対する恨み」および「カウンセリングの必要性」に対する言及が多くなった。

調査 II : ステレオタイプ尺度化

この調査では、尺度化によって被害者ステレオタイプを体系的に捉えるとともに、社会における被害者の位置付けを明らかにすることを目指す。具体的には、調査 I で得られた内容に基づいて尺度を構成し、被害化ステレオタイプ、すなわち「どのような人が被害者になるのか」に関する認知と、*Stereotype Content Model* (Fiske, *et al.*, 2002) との関連を検討する。その際、先行研究で検討されてきた他の社会的集団 (e.g., 高齢者) との異同もあわせて確認する。

また、被害後ステレオタイプ、すなわち「被害者 (遺族) はどのような状態にあるのか」の認知については、第三者の測定に加え、もうひとつのプロジェクトを通じて同一項目につき被害者本人と支援者にも適合度を尋ね、3 者間比較を行うこ

とにより、被害者の心の状態および必要な支援に関する推論の乖離状況を明らかにする。

調査実施時期（予定）：2013年2月

調査Ⅲ：ステレオタイプの社会的帰結

この調査・実験では、被害者に対するステレオタイプの認知がもたらす社会的影響を特定するとともに、ステレオタイプの認知の低減方法についても検討する。

第一に、被害者ステレオタイプの社会的な帰結、すなわち、被害者に対する支援意図や、犯罪原因の推論、法的判断など、被害者支援に関わる要因に及ぼす影響を明らかにする。具体的には、調査Ⅱにおいてとくに高く評定された被害化ステレオタイプ項目に沿って、シナリオ上「典型的被害者」と「非典型的被害者」を記述し、上記の意図・推論・判断における差異を比較検討する。第二に、被害者ステレオタイプを低減し、より実情に即した心の推論を可能にする条件を特定するため、被害者の視点取得を促進する操作が、被害後ステレオタイプにもたらす効果を検証する。

調査・実験実施時期（予定）：2013年5月

プロジェクト2

：被害者自身の心の推論

個人がストレスを受けた時期の対人関係が、以降の適応状況に及ぼす影響については、ソーシャルサポート研究において多数検討されている。この中には、死別を体験した人の精神的健康度に対するソーシャルサポート効果に着目したものがある（Lehman, Ellard & Wortman, 1986; Dakof & Taylor, 1990; 大和田, 2003）。犯罪被害による死別は、間違いなくもっとも大きなストレスのひとつであり、被害からの回復は、そうした状況下で被害者がどのようなソーシャルサポートを得てきたかに左右されるものと考えられる。ソーシャルサポート、つまり被害者に対する社会的支援は、ただあれば良いというものではなく、どのような支援をいつ、どの程度提供していくことが受け手である被害者のニーズ充足につながるのか、ということへの理解に基づいて行われる必要がある。

とりわけ、支援提供者である被害者の周囲の人々は、被害者との関係性において正負両面の影響力を持ちうる、非常に重要な存在であり、この

対人関係の成否は、被害者のその後の回復に大きな影響力をもつだろう。その意味で、被害者の身近にいる人々が実際にどのような支援を行い、そして、それについて被害者がどのように受け止めているのか把握することは有益である。本プロジェクトでは、被害者支援をソーシャルサポートの一形態と捉え、被害後の周囲の支援が、被害者のその後の適応に与える影響について詳しく検討する。具体的には、以下2つの調査を実施し、被害者支援を受け手、送り手の両視点から捉えることにより、支援の現場で起こりうるニーズのギャップを測定し、そうしたギャップがどのように改善可能であるかについて検討を加えるものである。

調査Ⅰ：被害者調査

犯罪被害が対人関係の構造にもたらす影響に着目し、被害者が周囲からの支援をどのように受け止め、自身が支援者や周囲の人からどのように見られているか（メタ推論）、「支援者」に対してどのような印象を抱いているか、そしてそのことが現在の心理的状态にどのように影響しているかにつき、面接法を用いて明らかにする。

対象者は、殺人・交通事件を含む犯罪被害により家族を失った遺族のうち、年齢や事件発生時期などを考慮して抽出する30名程度である。具体的には、調査による心理的な負担を考慮して、年齢は20代から70代までとし、なおかつ事件から3年以上が経過している遺族を対象とする。対象者への協力依頼の方法は、主として被害者団体の定例会などの場において調査主旨の説明を行い、協力の意思がある場合には個別に連絡先を伝えてもらうというものである。可能な場合には、団体代表者に斡旋を依頼することもある。その他、調査協力が可能と思われる対象者に直接、調査協力の依頼を行う。

調査は一対一で行われる、60分から75分程度の半構造化面接である。面接は、あらかじめ決められた設問に沿って進行する。面接内容は対象者の同意のもと、メモとして記録すると同時に、ICレコーダーに録音したのち、逐語化する。

調査実施時期（予定）：2012年11月～2013年2月

調査Ⅱ：支援者調査

被害者の周囲の人々が、被害者に対してどのよ

うな内容の支援をどの程度提供しているのか、そして、行われた支援の有効性についての認知、また、支援する中で生じる被害者との葛藤の有無やその内容、被害後ステレオタイプ（「被害者（遺族）はどのような状態にあるのか」）の支援前後の変化などについて明らかにする。

具体的には、(本研究の直前に実施する) 調査 I への協力被害者の紹介を通して、親戚、友人・知人、地域の人々に調査協力を依頼する。調査票の配布方法は、被害者と対象者の希望を踏まえ、直接郵送あるいは被害者を經由した間接郵送とする。調査 I の対象者は 30 名を予定していることから、遺族 1 名につき約 3~4 名の紹介を依頼するとして、合計 100 部程度の調査票を配布する予定である。配布に際しては、協力依頼書と切手を貼った返信用封筒を同封し、郵送法にて調査票の回収を行う。

調査実施時期 (予定) : 2013 年 2 月~3 月

現時点での総括

以上のとおり、本研究は、1) 被害化要因や被害後の状態に対する第三者のステレオタイプの認知、2) 被害者のメタ推論、に着目した 2 つのプロジェクトから構成される。最終的にはこれらの知見が統合され、被害後の状態 (被害後ステレオタイプ) に関する第三者・支援者・被害者の推論が比較検討される予定であり、これにより、被害者の真に必要なとする支援と、実際に提供されている支援、あるいは「必要である」と社会に認識されている支援におけるギャップが明らかになる。必要-実際のギャップが特定されたならば、それらを埋めるために必要な事柄を具体的に議論することが可能となり、このような手続きを通して、被害者が望む支援の在り方の構築に資する知見を生み出すことが、本研究の最終的な目的である。

引用文献

Abrams, D., Viki, G. T., Masser, B., & Bohner, G. (2003). Perceptions of stranger and acquaintance rape: The role of benevolent and hostile sexism in victim blame and rape proclivity. *Journal of Personality and Social Psychology*, 84, 111-125.

Buddie, A. M. & Miller, A. G. (2002). Beyond rape myths: A more complex view of perceptions of rape victims. *Sex Roles*, 45, 139-160.

Dakof, G. A. & Taylor, S. E. (1990). Victims' perceptions of social support: What is helpful from whom? *Journal of Personality and Social Psychology*, 58, 80-89.

Fiske, S. T., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and Warmth respectively follow from perceived status and competition. *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.

Frese, B., Moya, M., & Megias, J. L. (2004). Social perception of rape: How rape myth acceptance modulates the influence of situational factors. *Journal of International Violence*, 19, 143-161.

Jenkins, M. J. & Dambrot, F. H. (1987). The attribution of date rape: Observer's attitudes and sexual experiences and the dating situation. *Journal of Applied Social Psychology*, 17, 875-895.

Lehman, D. R., Ellard, J. H. and Wortman, C. B. (1986). Social support for the bereaved: Recipients' and providers' perspectives on what is helpful. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 54, 438-446

内閣府 (2009). 犯罪被害類型別継続調査 <<http://www8.cao.go.jp/hanzai/report/h20/indei.html>> 2012 年 12 月 1 日

奥村正雄 (2005). 犯罪被害者のニーズ : 2 回の犯罪被害者実態調査をとおして 被害者学研究, 15, 21-33.

大久保恵美子・阿久津照美 (2002). 犯罪被害者支援に求められるもの : 被害者遺族のアンケート調査から 被害者学研究, 12, 18-30.

大和田摂子 (2003). 犯罪被害者遺族の心理と支援に関する研究 風間書房